「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿とは？」

２０２４．３．　大分県教育委員会

CASE 48

1歳児

「なにかなぁ」

協力園
ルンビニこども園

「土をかけてあげようね。」

ふしぎだなぁ～

おもしろいなぁ～

見て　見て～

なにかなぁ～？

（これまでの経緯）

本園には数年前に環境を再構成した二つの園庭があります。西側には、築山を中心に、ボールの壁当て、砂場（小）、のぼり棒・鉄棒など、東側にはアスレチックや砂場（大）、ステージなどの様々なコーナーをつくっています。登園すると、年齢に関わらず、たくさんの子どもたちが自分のしたい遊びを楽しんでいます。

１月。いつもと同じように子どもたちは外で遊んでいます。この日、園庭には暖かい日差しが降り注ぎ、春のような陽気に包まれていました。

砂場（小）の横にあるテーブルを囲んで、数人の子どもたちが座っています。テーブルの上には、皿、お椀などの容器や小さいバケツ、スコップ、スプーンなどがあります。それぞれが、容器に砂を盛って、時々、口に運んで食べる真似をしながら遊んでいます。その様子を見て、保育者ａが「おいしいね～」と言葉をかけると、子どもたちも「おいしいね～」と言います。

１歳児のＡ児は、しばらくその場で遊んでいましたが、椅子から降りて、歩き始めました。ふと、砂の地面に置いてあるふるいに気付き、不思議そうな顔をして、座り込むとそれを見つめ、手に取ってひっくり返したり、ふるいの上に手を押し付けたりしています。今度は、ふるいから落ちた少し黒く見える砂を何度も何度も触ってみます。そのうちに、両足を地面に何度もこすりつけ始めました。そして、砂を握ってはズボンにもこすりつけます。様々な砂の感触を繰り返し確かめているようです。途中、手に付いた砂をじっと見たり、手を日光にかざしたり、裸足についた砂を触ってみたりしています。時折、笑顔になりこちらを見ます。

しばらくすると、ふと立ち上がって、振り向きました。そこには、園のフェンスがあります。すると、今度は、フェンスの近くにしゃがみ込み、地面の草を抜き、手に持って食べる真似をしたり、フェンス沿いに張っている白いカバーにそれを押し付けたりしていました。そのうちに、白いカバーに映る自分の影に気付き、それを目で追いながら、カバーに沿って歩き始めました。カバーの端まで行くと、フェンスだけになりましたが、歩くのをやめず、フェンスや壁、壁に取り付けられたパイプなどいろいろな物を見付けては触り、また歩きます。

今度は別の場所でふるいを見付け、中にあった砂をこぼしてみます。保育者ｂが、「パラパラ～パラパラ～」と言いながら、手に握った砂を落として見せます。少しの間、その様子を見たり、ふるいをひっくり返したりしていたＡ児はまた歩き始め、植え込みを見つけると、葉を触ったり、ちぎったりしてみます。保育者ｂも傍で同じようにします。

その後、プランターに近付いて、植えているノースポールを今にも抜こうとしているＡ児を見て、年上の子どもたちが、「あ～ダメ！ダメ！」と大きな声で言いますが・・・Ａ児はわからないような表情で、途中まで抜いてしまいました。その声を聞いて、他の子どもと一緒に向こう側にいた保育者ｃが傍に来て、「あ～抜いちゃったんだね。こうやって、パラパラ～ってお花に土をかけてあげようね。」と抜きかけた花を土に埋め戻し、土を優しくかけながら、Ａ児に話しかけます。Ａ児はその様子をじっと見ています。それを見て、先ほどの子どもたちもほっとした表情でその場を離れました。

その後も、Ａ児の園庭の散歩は続きました。

自然との関わり・生命尊重　　豊かな感性と表現
保育者の援助・環境構成のポイント

園児に寄り添う保育者の存在

・園児と一緒に遊び、「おいしいね～」「パラパラ～」などと、園児の気持ちを代弁したり、していることを言葉にしたりする。
⇒園児が言葉に触れ、言葉を獲得していくことにつながる。
・傍でＡ児に話しかけながら、花を土に埋め戻す。
・どの保育者も場に応じて言葉をかける。
⇒温かい雰囲気で受容することで、安心感へつながる。

様々なものや人と触れ合える環境の構成

・異年齢の子どもたちと自由に触れ合える園庭
・寄って遊べるように砂場の横にテーブルを設置
・ごっこ遊びが十分にできるような容器や道具の準備
・様々な自然やものに出合える環境と時間の確保

事例から見られる１０の育ち

自然との関わり・生命尊重
豊かな感性と表現

Ａ児は砂、光、影、草、葉など自分のまわりにある身近なものや環境に目を留め、「見たい、触りたい」という欲求から好奇心をもって関わり、その不思議さを楽しんでいる。砂に手を伸ばしては、手、足、衣服の上からと、触れるところを変えながら感触を何度も確かめ、感性を働かせて、その感覚を味わっている。途中、手や足に付いた砂をじっと眺めたり、日光に手をかざしてみたりする。自分のしていることに満足したのか笑顔になる様子も見られる。また、偶然見つけた自分の影に心惹かれ、一体何かと追いかけるなど、興味・関心が尽きない。

このような経験を何度も繰り返し、「なにかなぁ」「おもしろいなぁ」「もっと～してみたい」と思いをめぐらせることから、環境への興味・関心が広がっていき、今後「どうしてこうなるのかな？」という探究心につがっていくと思われる。

さらに、興味・関心があるゆえに、プランターの花を見付けると地面の草と同様に抜いて、何だろうかと確かめようとしている。それに対して、保育者はやさしく言葉をかけながら、大事そうにその花を埋め戻している。今はよくわからなくても、年上の子どもたちがそうであるように、このような大人とのやり取りを積み重ねる経験を通して、その意味を理解し、植物に親しみ、大切にしようとする態度が育っていくと思われる。

このように自然や環境に直接触れる体験を通して、豊かな感性や感情、好奇心等が湧き出てきて、それが今後の探究心や思考力、表現力へとつながっていくと思われる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

自然との関わり・生命尊重　　豊かな感性と表現　　自立心

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。